

守弘仁志先生をしのんで

学校法人熊本学園 理事

熊本学園大学社会福祉学部教授

小 泉 尚 樹

本学社会福祉学部教授の守弘仁志先生が昨年2019年9月、熊本市新大江のご自宅でお亡くなりになりました。秋学期が始まった最初の授業日に先生が教室にお見えにならないと学生たちが教務課に問いあわせ、大学から職員がご自宅のマンションを訪ねて先生のお亡くなりになっていたことが明らかになりました。その後、葬儀などお身内で済まされ、ご遺骨はご兄弟の手でご出身の東京に運ばれたと伺っています。63歳のご年齢でした。まだまだこれからというときにお亡くなりになったことはまことに残念というほかありません。心よりご冥福をお祈り申し上げます。今回、守弘先生の追悼号を編集されるということで、先生のご友人や多くの教え子がおられるなか、守弘先生の赴任当時の熊本短期大学以来の同僚として、在りし日の守弘先生を偲ぶ一文を依頼されましたので、哀悼の念とこれまでのご友誼に感謝する気持ちを込めて、以下、思い出すままに書きとめるほどのことしかなしえませんが、守弘先生を追悼する一助となれば幸いです。

守弘先生ー以下、守弘さんと呼ぶことをお許しください、は現熊本学園大学の前身である熊本短期大学に1990年に赴任されました。中央大学大学院で社会学を専攻し、「社会情報学」や「マスコミュニケーション論」を専門分野として研究され、短大時代から現熊本学園大学時代にいたるまで、「社会学概論」や「情報メディア論」などを担当されました。またご所属の社会福祉学部福祉環境学科では「生活と福祉情報」「社会調査」といった科目を講義し、大学院では「福祉環境学方法論特殊研究」を担当され、熊本の内外に

活躍する多くの教え子を育てられました。これはおそらく私だけが感じたことではなかったと思いますが、守弘さんには短大に赴任した当初から都会の人らしいどこかあか抜けた雰囲気がありました。現代文化をリードする一分野のマスコミや情報に関する学識をもとに、現代若者論や若者とメディアとのかかわりについて語る授業は、学生たちに大いに受けたと思います。また、若者の情報行動を同時代の社会学理論から学び、その特徴を仮説にして、実際の大学生や高校生の意識調査をとおして実証的に検討する守弘さんの学問スタイルには、研究の堅実さや良心とともにスマートな手際よさが感じられました。こうした守弘さんの研究のスタイルや、語りだすほどにこやかになる表情や風貌から、いつしか学生たちから「皇太子」という異名でよばれるようになりました。これには同僚のあいだでもなるほどと納得したものでした。時代が昭和から平成に切替わった年以降、第二次ベビーブームによる学生増の影響で大学は昼間夜間部を問わず、教室が満席になる賑わいをみせていました。そしてそのブームのまだ冷めやらぬうちに熊本学園大学が発足し、完成の3年後には社会福祉学部新たに福祉環境学科が誕生しました。守弘さんはこの新学科の学科長を牧野先生から引き継がれ、学科の完成年度(2003年度)までその重責を果たされています。このころからかどうかは確証がありませんが、守弘さんの研究教育上の関心は「福祉情報ネットワークによる地域支援」や「遠離島とくに沖縄の離島の情報化」や「離島における情報格差」といったテーマに広がっています。「福祉情報ネットワークによる地域支援」では、情報ネットワークによる情報提供、あるいは情報交換などがどのような形で地域社会の支援になるかを問題提起として、社会生活、地域生活における情報ネットワークの有用性と問題点を検討されました。そしてその具体的な成果は「熊本バリアフリーマップ(身体障がい者のためのトイレマップのインターネット地図上の情報提供)」として、守弘さんが後に長くその所長を務められた熊本学園大学附属社会福祉研究所のホームページに掲載されました。こうした実践的試みはスマホの普及により当たり前となった、地域生活における電子情報ネットワークの福祉的利用等の先駆的試

みとして高く評価されるのではないのでしょうか。また「離島の情報化」の問題では、「最新の情報通信技術の利用」による情報の地域間格差の解消をめざす沖縄県の島しょ地域のための情報通信政策に理解を示しつつも、それが観光をよび込み、中央からの産業誘致につながるという方向性よりは、沖縄の島しょ地域の「特に音楽や民芸品の制作」にみられる独自の歴史文化を中央に向けて「地域文化情報」として発信するために活用する重要性を強調しておられたと理解しています。

最後に、守弘さんは終生独身で過ごされました。見合いや結婚の話などには見向きもされませんでした。とくに気難しいところがあったわけではなく、われわれ同僚とはよく飲食をともにし、付き合いは良い方でした。亡くなる数年前からは単身赴任の同僚を集めて夕食難民の会なるものをつくって面白がっておられました。孤独と連帯の共存が信条だったのでしょうか。社会学者らしい観察眼をもち、ユーモアにあふれたお人柄でした。ありがとう、守弘さん、安らかに眠りください。